

## 園藝命名理論特に柑橘屬の改訂に就て

田中, 長三郎  
九州帝國大學農學部園藝學教室

<https://doi.org/10.15017/20728>

---

出版情報：九州帝國大學農學部學藝雜誌. 1 (5), pp.266-273, 1925-12. 九州帝國大學農學部  
バージョン：  
権利関係：

# 園藝命名理論特に柑橘屬の改訂に就て<sup>1)</sup>

田 中 長 三 郎

(大正十四年十一月十四日受領)

## 目 次

1. 概論
2. 園藝種の合理的存在
3. 萬國植物命名規約上の園藝種
4. 園藝命名規約上に忘却せられたる園藝種
5. Type 觀念に對する Vienna code の改訂
6. 結論

## 1. 概 論

著者は嚮に從來諸學者が柑橘屬の分類を試みて一も成效する所無かりし理由を論じ (3) 左の諸項を擧げて之を説明せり。

1. Type 觀念の缺如によりて種の限界尠大し、正當なる種間の關係不明となりたる事。
2. 形態解剖記載上の粗漏又不備の爲分種の條件を逸し、爲に種の癒合を醸成せる事。
3. 植物探檢並に植物研究機關連鎖の不充分により地理的分布不明を來し、種現存境界の不確實は總て種其物の不分明を來せる事。

是に次で更に討究を進めし結果、柑橘屬の如き無數の栽培品を有する植物を適當に命名するには植物學種と同等なる園藝種 *Horticultural species* の存在を是認し、其の命名法を一定する事絶對必要にして、若し之を行はざれば決して完全に此事業を完徹する能はざる事を論じ (4)、續て柑橘屬の如き多數の園藝植物を分類するには、其現存の形態を本位として批判を下し、其の由來の如何に對して何等の想像を用うる事なく、明に雜種と認定し得る證據を缺くものにして種的特徴を完備するものには、其蕃殖法の如何に係らず少くとも何等かの方法を以て其形質を永久に保存し得る以上は之を種として取扱い、種名を與へ、總ての命名學上の特點を附與する事を正當となし又かゝる園藝種を標徴する爲唯命名の上に既に慣用法とし

1) 第二回西部農學會席上講演。(聯合寄興。九州帝國大學農學部園藝學教室第九、宮崎高等農林學校實業植物學教室第三。)

て許されたる Hort. (= Hortulanorum) の語を以て Author 名に換へ、之を野生種より判別するの法となすべき事を提唱せり (5)。

今本論文に於て論ぜんと欲する所は〔1〕此の定理の確實なる事、〔2〕此定理が萬國植物命名規約に違反せざる事、及〔3〕此定理を萬國園藝植物命名規約條項に加入すべき必要ある事、の三項に加ふるに Type 觀念に關する既述の條項を更に擴張し、〔4〕記相文本位の命名規約は柑橘類の如き多くの園藝種を定義するには不完全なるを證し、基準標本の登録に關する條項を萬國植物命名規約に追加すべき事を提議せんと欲するにあり。

## 2. 園藝種の合理的存在

生物學上種と云ふは WETTSTEIN も定義せる如く重大なる性質 (Wesentliche Eigenschaften, essential characters) を基礎とし個體相互親子皆相等しき集團を稱するものにして、其の所謂重大なる性質は綿密にして周到なる形質解剖 (character analysis) を以て必然的に觀破せられ得るものなり。考ふるに生物の種は決して個體相互の性質の漸遷推移を以て無限界に存在するものに非ず、必ずや幾多の淘汰を以て重大性質の截斷を來し、幾多の LINNÉ 種即 LOTZY の所謂 Linneon を生ぜるものにして、地球上一定數の種は本質的に嚴存するものなり。唯之を判定する吾人生物學者の智能如何によりて其存在の限界を正しく認定し得るか、又は之を誤認して複合種 aggregate species を想定するか孰れかたるなり。而して植物分類學は植物の種の限界を確定する事を以て主目的となし、茲に新に限界せられたる種は必ず新種として公表せらるゝの必要あるなり。然れども更に一步を進めて考ふるに、Linneon は蓋し單なる相同個體の集團にして因子組成 gametic constitution と同一なりや否やは論ずべきに非ざるなり。假令吾人の經驗せざる久しき以前に於て雜種たりしものにして現在異型個體の幾分かを放出するものありとするも重大性質にして同一なる以上は夫等同型個體は皆等しく一種たるの價値ありと認められ、其性質群 character complex に對して formula 即二元名を付する事を吾人は認許せり。故に種は本來常に野生たらざる可からざるの制限なく、將又雜婚結實植物 cross-fertile plant たる以上其野生たると園養たるとの故を以て因子組成上差別ありと認め得る理由はなく、從て目前に於て雜種性質の證據を缺く植物は其表現する種的特徴に對して野生たると園養たるとは何等重大なる意義なきを知るべし。即 LINNÉ 種は種子を以て繁殖すると clone を以て繁殖するとの差なく、唯重大性質の差あらば其性質存在の條件の如何に係らず之を種と認めて少しも其定義に舐觸せざるなり。即野生種と云ふも園藝種と云ふも皆等しく LINNÉ の種にして其取扱を一にして何等不合理を生ぜざる理なり。

然るに由來一の迷信あり、即野生種に限り因子組成一様にして種たる價值を有し、之に反し園養にのみ發見する植物は假令重大性質よく獨立を保ち、子孫亦同型なるを通常とするものも因子組成多様な雜種群にして種たる價值なしと考ふる事之なり。故に柑橘屬中多數に存する獨立的個體群を皆強ひて他の野生種又は假想種の變種として其獨立性を無視せる如き著しき不合理を生ぜり。而して此迷信は學界の不用意に乗じて上記の種の定議を濫り、園藝變種を容認するも園藝種を樹立するの確信を動搖せしめ之を論ずる事を怠らしめたり。然れども輕微性質の變異は園養植物に最も多く従て園藝變種は野生變種よりも頻繁なるの理由を以て種の成生が野生と園養と別個の理由に依りて行はると考ふるは誤にして、未だ吾人は變種の形成と種の形成とが同一なりと類推を以て處斷する何等確實の證據を有せざるなり、況や未だ何人も如何なる状態に於ても LINNÉ 種の成生を目撃せしものなきに於てをや、之種の起原は漸變によるや、偶變によるや將又雜婚によるや今猶學家の間に論争を斷たざる所以なり。即園養たるが故に種たらざるの理由は一も認むる由なく、重大性質の顯著なる以上は園養たるが故に種の條件に缺くると考ふるは全く誤謬たるなり、況や吾人の認むる種は LINNÉ の種にして、同型の個體のみを生ずるを條件とする JORDAN の種たるを要せざるあるをや。

柑橘屬にては LOUBEIRO の *Citrus nobilis* は多數の著者によりて複合種と化せられたるも多くの園藝種を分離し得る事は著者の屢々指摘せる處にして (4) (5), *Citrus nobilis* LOUR., *Citrus deliciosa* TEN., *Citrus unshiu* HORT., *Citrus poonensis* HORT. 等皆獨立の園藝種たるなり。

### 3. 萬國植物命名規約上の園藝種

多數の園藝植物を取扱ひたる植物分類學者の間に Hort. と記せる二元名を野生種同様に認容する事は常習的事實にして、Vienna code (1) も之を有效と認め其第 42 條に次の如く記せり。

『未刊名稱を發表するに際し其原著者名を引用する時は之を發表せる著者の名は必ず其次に記す事を要す、園養を本とする名稱にして Hort. と記せるものも亦此原則に従ふ

(Le même procédé doit être suivi pour les noms d'origine horticole lorsqu'ils sont accompagnés de la mention "Hort.")』

右の舉例には *Gesnera Donnell-smithii* HORT. ex HOOK. Bot. Mag. tab. 5070 を引けり。之即 HOOKER が最初より園養種をして記載せしを示すものにして、ex HOOK. 云々は第三者が本名を使用する時に附記すべき規定を示せるものなり、HOOKER 自身は決して野生種の場合の如く自姓を署名せざりしなり。斯の如き例は無數に存し STEUDEL の *Nomenclator botanicus* 等を檢せば數百

を數へ得べし、是等は即皆著者の所謂園藝種にして本規約條項は正に其の存在を許容せしものなり。園藝種なる名稱は著者の創意なるも其主義は既に萬國植物命名規約上に明記せられあるを知る可く、著者の提議は即本規約に背戾する事なきを證するものなり。

#### 4. 園藝命名規約上に忘却せられたる園藝種

1910年 Brussels 植物命名會議附屬委員會に於て可決せる園藝命名規約<sup>(2)</sup>は全然 Vienna code を核心として決定し、之に一二種重要事項を追加せるものなるも、變種及雜種の命名に對しては相當詳細なる規定を設くるも、如上の規約第42條の條文を無視し園藝種に對しても論ずる所なし、之本規約の一大弱點にして次の改訂を必要とするなり。

第1條。 “horticultural varieties and hybrid” を “horticultural species, varieties and hybrid” と改む<sup>2)</sup>

第1條。 bis (新提案) 『園藝種の命名は Vienna code に掲げたる種々の命名規定に従ふべし、但唯一の變則として種名の次に記すべき “Hort” の語の次に限り著名を記し得る事を限定す。』

『園藝種にして羅匈固有名詞を以て種名となすものは有效なり、而して斯る名稱の種以下の低位に移動せる時も之を撤回せしむる事を得ず、且斯る名稱は羅馬字體を以て記す事を得ず。』

[例。 *Citrus otaitensis* HORT. ex SAVASTANO in Ann. R. So. Sup. Portici III : 38, 1884  
= *Citrus limonia otaitensis* TANAKA in Bul. Soi Fak. Terk, Kju. Imp. Univ. I no. 3:  
113, 1925 ]

#### 5. Type 觀念に對する Vienna code の改訂

現用命名規約に少しも違背せざる植物種名中記載文の不備により其使用を不可能ならしむるもの極めて多し。夫等は種々の理由あるに基かんでも若し依て以て記載を作成せる基準標本 type specimen だに存在すれば是を解決する事必ず可能なるべし、何となれば記載文に顯れたる該植物の形態は實際其標本の具體する形態の唯一少部分に過ぎるを以てなり。故に基準

2) 第1條正文。 Article 1.—Horticultural nomenclature is based upon the rules of Botanical Nomenclature adopted by the International Congress of Botany, held at Vienna in 1905. The Horticultural Congress accept all the principles, and rules, so far as they apply to names of species and groups of a higher order, but adopt the modifications and additions contained in the following Articles for horticultural varieties and hybrids of cultivated plants.

標本の存在は規約に於て是認せられたる種名の安定を保證する最も重要なる條件にして、其の重要の度は遙に原記相文 original diagnosis 以上にありと稱して可なり、殊に柑橘其他の園藝植物の如き記載事項許多なる植物は到底尋常の記相文或は圖畫を以て完全に其形態を表現し得べきに非ず、即種名の安定を保證する爲には基準標本の存在は絶對必要にして、之を缺ける種名の存在は徒に命名上の紛糾を惹起する主因として夫等植物諸屬の改訂に永久的障害を與へ、植物分類學の進歩を妨ぐるものなり。故に MERRILL の如きは既に基準標本の亡失せる重要著者の植物志を恢復せんと欲し RUMPHIUS, FLANCO, LOUREIRO 等の植物に就きて topotype collection を完成せるあり、著者も亦 THUNBERG, ASA GRAY 等の日本植物に對して之を實行し居れる所以なり。如何に柑橘屬に於て名實相反し、基準標本を見て驚歎せるかを例示せば ENGLER の *Citrus hystrix* DC. subsp. *acida* (ROX B.) BONAVIA apud ENGL. in ENGL. & PRANTL, Nat. Pflanzenf. III. 4: 200, 1896 は引用文献並に記文等は Lime なる事明瞭なるに係らず、Dahlem に於ける腊葉館所藏の *Citrus hystrix* DC. subsp. *acida* BONAVIA とある標品は唯一枚日本産ユズ (*Citrus Junos* SIEB. sec. TANAKA) あるのみなり。又其の *Citrus Aurantium* LINN. subspecies 中多くのものは標本を缺き、subsp. *Keonla* Engl. の如きは温州蜜柑あり Lime あり、Lemon あり孰れを以て typus となすべきや判定に由なし。即柑橘屬の如き original genus は實際標本を見るに非ざれば著者の該種に對する解釋を判知するに由なきを知るべし。多くの園藝植物は同例に屬するも野生種に於ても其例少からず。既に著者の指摘せる如く ( ) THUNBERG の *Laurus glauca* は標本を見て初めて樟科のシロダモにあらずして紫金牛科のソゲキなりと知り、其 *Menispermum acutum* は防已科のオホツツラフデに非ずして蘿摩科のキジョランなりしを知りたる如き例は一二にして止まらず、實に種名の決定は文に依らずして物に依る事の正しきを痛切に感ぜしむるなり。即今後基準標本を重視する規定を設くるに非ざれば現用規約は唯學名改變の機會を多からしむるに止まり眞の種の限定事業に有害なる結果を起さしむるとの非難を蒙る恐あり。故に今後新命名に對して其野生種たると園藝種たるとを問はず基準産地 type locality と基準標本の所在とを明記する事を種名成立の一要件となす條項を設くる事を提唱せんと欲す。即 Vienna code 第 36 條 bis の次に左の條項を設くる事を望む。

第 36 條 ter. 『…及夫以後に於ては<sup>3)</sup>植物の種及種より下級の新品の名稱は其基準産地と其基準標本永久貯藏所名とを明記するに非ざれば有效たる能はず。』

3) 次回開催の國際植物會議に於て日附を決定し之を記入す。

## 6. 結 論

- 1) 園藝種は植物學者間に於て不文律的に存在を認め居るに係らず今日まで其の存在に關し明確の決論を下せるものなきを以て著者は之を定義し、其合理的存在を論述せり。
- 2) 園藝種の設定は園藝植物を分類する重要な手段にして、殊に柑橘屬の如き *critical genus* に於ては之を設定するに非ざれば完全なる分類をなす能はず。
- 3) 園藝種は萬國植物命名規約第 42 條に於て明に其の存在を認め且其命名法を確定せり。
- 4) 萬國園藝植物命名規約は不用意にも園藝種の指定を漏せり、故に其第 1 條の條文を改定し、且第 1 條 *bis* を設定し前者と連關せしむる事を提議せり。
- 5) 園藝植物の分類命名を最困難ならしむる理由は現用植物命名規約が基準標本に關する規定を無視せる事に起因する事を柑橘の場合を以て例示せり。
- 6) 野生植物の命名に於ても亦基準標本の存在は名稱の安定を保證する重要事項なるを示し基準産地及基準標本所在を明記する事を以て種名有効の一條件たらしむ可く規約第 36 條 *ter* の設定を提唱せり。

## 引 用 文 献

- (1) Règles internationales de la Nomenclature botanique adoptées par le Congrès Internationales de Botanique de Vienne 1905. in *Verhandlungen des internationalen botanischen Kongress in Wien 1905*. pp. 165-261. Jena, G. Fischer, 1906.
- (2) Rules of horticultural nomenclature adopted by the subsection on nomenclature at the International Congress at Brussels, 1910. in *Journ. Roy. Hort. Soc.*, vol. 37, pt. 1, pp. 149-151. London, 1911.
- (3) 田中長三郎 TANAKA, Tyôzaburô. 柑橘分類に關する基礎的問題を論ず Discussion on some fundamental problems in the taxonomy of Citrus fruit. in *農學會報 Journ. Sci. Agr. Soc.* no. 207: 945-986, T. 8, 1919.
- (4) ——— Citrus fruit of Japan, with notes on their history and the origination of varieties through bud variation. in *Journ. Hered.* vol. 13, no. 6, pp. 242-253, illus. 1922.
- (5) ——— 世界の主要柑橘類 Principal species of Citrus fruits of the world. in *九州帝國大學農學部學藝雜誌 Bult. Sci. Fak. Ter. Kju. Imp Univ.* Vol. 1, no. 1, pp. 20-31. T. 13, 1924.
- (6) ——— 二三の THUNBERG 植物に就て On certain Thunbergian plants from Japan. in *ditto*. vol. 1, no. 4, pp. 191-209. T. 14, 1925.

HORTICULTURAL NOMENCLATURE, WITH SPECIAL  
REFERENCE TO THE REVISION OF  
THE GENUS *CITRUS*

(Résumé)

Tyôzaburô TANAKA

Horticultural species is admitted in the International Rules of Botanical Nomenclature Art. 42, in the form *Gesnera Donklarii* HORT. ex HOOK., though it lacks a definition and criticism of its logical existence. The author maintains that the Linnaean species can exist within the garden plants of unknown origin, which show no evidence of hybridization. Essential botanical characters may distinguish such plants from other botanical species, and make it impossible to leave them stay in the rank of horticultural varieties. Horticultural species is therefore defined as the species occurring only in the garden, possessing distinct specific characters which can be perpetuated either by seminal or clonal propagation. No systematist confines the definition of species to plants which throw out homogenous offsprings (Jordan's species), nor does he mean those which possess homogenous gametic constitution (Lotzy's species). At any rate, the Linnaean species is genetically an aggregate unit, but it is the only accessible standard of living organism, reached by their morphotypic representation sufficient to receive distinction. Consequently, equal treatment of wild and garden species is absolutely logical, so far as they belong to the Linnaean species and are independent by essential botanical characters.

This clear conclusion naturally leads the proposal of amending the International Rules of Horticultural Nomenclature adopted at the Brussels Congress 1910, in the following idea and passage :

Article 1. Amend "horticultural varieties and hybrid" to be "horticultural species, varieties and hybrid."

Addition of "Article 1 bis" with the text : "Horticultural species is named in accordance with the Rules of species nomenclature given in the Vienna Code, with a single modification in restricting the use of the author name to come after the word "Hort." which should follow the specific epithet of the given name."

(New paragraph) "Any horticultural species receiving Latin



proper name as the specific term is valid, and never can be proscribed when they are moved into the ranks lower than the species. Such name should not be written in Roman characters."

(Example) "[E. g. *Citrus otaitensis* HORT. ex SAVASTANO in Ann. R. Sc. Sup. Portici III : 38, 1884 = *Citrus limonia otaitensis* TANAKA in Bul. Sci. Fak. Terk. Kju. Imp. Univ. I. no. 3 : 113, 1925.]"

From the author's experience, the establishment of horticultural species is most successful in revising such critical genus like *Citrus*, in which many distinct types exist only in the gardens. For instance, splitting the aggregate species *Citrus nobilis* AUCT. into distinct horticultural species *C. nobilis* LOUR., *C. deliciaosa* TEN., *C. unshiu* HORT., *C. poonensis* HORT. etc., is essential to represent the true nature of things and to warrant the stability of nomenclature. He also believes that such a procedure is very necessary to accomplish the logical classification and nomenclature of horticultural plants.

The author also attained simultaneously to the conclusion, that it is highly important to take the matter of type specimens into serious consideration, in order to bring the Rules of Nomenclature into the real merit and benefit to botany. The absence of type specimens has caused an innumerable cases of destruction and abolition of valid names of plants worthy to claim their right of existence. Specially taking the Citrus fruit for example, it is experienced absolutely necessary to consult the type specimens to detect its true bearing and significance involved in its nomenclature and description. Even illustration is not sufficient for such horticultural plant to protect its distinctness and permanency. He emphatically claims that the practical disadvantage encountered in the execution of the Rules, is primarily due to the lack of mention about the perpetuation and restoration of the type material, which is so clear as being far important than any absolute and non the less perfect Latin diagnosis. An additional paragraph to the Art. 36 bis of the Vienna Code, is demanded as a measure to give proper credit to the type material to which both binomial and description are subordinate.

Proposed to create "Art. 36 ter" with the text: "On and after... [insert date to be fixed at the next International Botanical Congress] publication of names of new species and the lower groups of a species of plant will be valid only when their type localities are indicated, and the place, where the type material is permanently deposited, is mentioned."